11．変形性脊椎症と脊柱管狭窄症の疼痛：保存療法

Conservative treatment for pain with spondylosis and spinal canal stenosis.

竹林　庸雄・山下　敏彦

Tsuneo Takebayashi（准教授），*Toshihiko Yamashita*（教授）／札幌医科大学医学部整形外科

変形性脊椎症や脊柱管狭窄症に対する保存療法では薬物療法が中心的役割を担っているが，疼痛の発生源や機序を把握し，経過に応じた治療戦略を組み立てることが重要である．薬物療法には，NSAIDsやアセトアミノフェンなどの鎮痛薬，筋弛緩薬やプレガバリンなどの鎮痛補助薬，プロスタグランジンE1製剤，弱オピオイドなどが用いられるが，病態に適した薬剤を選択し，効果と副作用をみながら安全かつ有効に使用することがポイントである．加えて，漫然と使用せず一定の効果が認められれば，患者の様子をみながら漸減していくことも重要である．

key words

Conservative treatment
Spondylosis
Spinal canal stenosis
Intermittent claudication
Medication

はじめに

変形性脊椎症と脊柱管狭窄症は，加齢に伴う代表的な変性疾患である．高齢者の腰椎では，高頻度に脊椎の変形や脊柱管狭窄などの画像所見を認めるが，必ずしも腰痛や下肢痛などの症状を呈するわけではない．したがって，変形性脊椎症と脊柱管狭窄症においては，その病態を十分に把握し，症状に応じた治療戦略を練る必要がある．本稿では，腰椎における変形性脊椎症と脊柱管狭窄症に対する薬物療法について概説する．

変形性脊椎症

1．病態と治療

変形性脊椎症は，椎間板や椎間関節，靱帯組織の退行変性により脊柱の支持性が低下することからはじまる．Kirkaldy-Willis[1]はこの脊柱の退行変性過程を，椎間板変性や椎間関節滑膜炎が主体の初期機能不全期，椎間板変性の進行や椎間関節包の弛緩がみられる不安定期，そして椎体の骨棘形成や椎間関節の変形肥大が現れる再安定期の3期に分類している．変形性腰椎症とは，この退行変性過程の結果生じるX線学的診断名であり，椎間板高の低下やvacuum phenomenon（椎間板内ガス像），骨棘の形成，腰椎の側弯，後弯，回旋変形やすべりなどを特徴とする（図1）．退行変性の結果，脊柱管狭窄による下肢神経症状が強ければ腰部脊柱管狭窄症，脊柱配列異常による症状が強ければ成人脊柱変形，不安定性に伴う症状が強ければ腰椎不安定症といったように，病態に応じてさまざまな捉え方がされるが，これらに含まれない腰痛を主体とする症例が，狭義の意味で変形性腰椎症として扱われる．加齢変性に伴う病態であるため慢性の経過をとることが多く，一次的な症状の改善がみられても腰痛は繰り返されることが多い．画像上の変性の程度と疼痛の程度は必ずしも一致せず，痛みの発生部位を特定することは難しいため，非特異的腰痛の一つである．そのため手術治療の適応となることは少なく，装具療法や理学療法とともに，薬

SAMPLE

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.